

第4室

(1) 15:30 ~ 16:00 (2) 16:10 ~ 16:40
(3) 16:50 ~ 17:20 (4) 17:30 ~ 18:00

第4室 (1)

SNS X

GIGA スクール構想と英語教員養成—英語教員をめざす大学生の ICT 活用能力調査—

藤田 賢 (愛知学院大学)

社会のグローバル化、人工知能 (AI) やモノのインターネット (IoT) が急速に進み、知識基盤社会が到来している。社会の在り方が劇的に変化されると言われる超スマート社会「Society5.0」を迎えるとともに、新型コロナウイルス感染症など先行きが不透明な「予測困難な時代」に対応するため、「令和の日本型学校教育」(中央教育審議会, 2021) が模索されてきている。このような教育を取り巻く環境の変化の中で、文部科学省は、2019年から「GIGA スクール構想」を打ち出し、多様な子どもたち1人1人に個別最適化された ICT 環境を実現するために1人1台端末を配付し、高速大容量の通信ネットワークを整備する計画を進めてきた。

本研究では、まず、GIGA スクール構想による英語教員養成と英語教育の方法の課題を整理する。具体的には、大学での英語教員養成では、ICT 活用指導力の向上が求められ、教職科目に「ICT 活用関係」1単位が必修化されることになった。英語教育の方法では、言語活動を中心に、交流・遠隔授業など様々な ICT 活用が可能であることが指摘されてきていることなどをまとめて報告する。

次に、英語教員をめざす本学の大学生26名を対象に、「教員の ICT 活用チェックリスト」(文部科学省, 2018) を実施した結果を報告し考察する。調査の結果、大学の授業で学習者として経験している ICT 活用の事項には自信が見られたが、教師として生徒に具体的な指導をする事項には不安が大きいことが推察された。英語科教育法でできるようにしておきたい事項の自由記述からは、学習支援ソフトを使った課題の出し方、オンラインでの生徒の意見回収方法、デジタル教科書の活用技術などを求める声があった。

第4室 (2)

SNS X

Zoom を活用した英語科教育法での授業見学の工夫

階戸 陽太 (鹿児島国際大学)

本発表は、英語科教育法で行う授業観察を、Zoom を活用して遠隔で行った2年目の実践について、考察を行うことを目的としている。

2020年に、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、発表者が担当する英語科教育法で取り入れていた授業見学を、Zoom を使用し、遠隔で実施した。学生と授業を依頼した教員、それぞれの視点から、Zoom を活用した授業見学の「良さ」と「課題」が明らかとなった。「良さ」について、

学生の視点では、実際の授業の雰囲気があったこと、授業の内容以外の学びがあったこと挙げられた。教員の視点からは、生徒が普段通り授業を行えたことが挙げられた。一方、「課題」として、学生の視点からは、黒板が見えないなど、わかりにくさが挙げられた。教員の視点では、インターネットの環境が挙げられた。

この結果を受けて、2021年も Zoom を活用して授業見学を遠隔で実施した。新型コロナウイルスの状況に変わりがなかったため、実際に訪問しての授業見学を実施するとは難しかった。前年を踏まえて、2つの工夫・変化があった。一つは、撮影を定点で行うだけでなく、移動して行った。中学校の授業観察では、授業者以外の英語科の先生が協力してくださり、カメラの付いたパソコンを移動することができた。高校の授業観察では、生徒が活動する時間帯だけだったが、移動して撮影をお願いすることができた。二つ目は、意図したわけではないが、授業を行う中学・高校側のインターネット環境が改善されたことである。

こうした2年目の実践について、学生の振り返りと教員のインタビューを分析し、成果と課題を考察した。学生の振り返りは、2年間続けて授業見学を行った5名を対象とした。教員も、これまでお願いしている方にインタビューを行った。詳しい分析結果を、当日の発表で提示する。

第4室 (3)

SNS X

学生の評価する力をどう養うか

—小学校外国語科「話すこと（発表）」の動画作成と評価体験を用いた試みを通して—

尾上 利美（和歌山大学）

2020年度に小学校、2021年度に中学校、そして、高等学校においても今年度の入学生から新しい学習指導要領の元での授業が実施されている。小・中・高等学校の外国語の学習をつなぎ、外国語によるコミュニケーション能力の向上を目指す外国語教育が全ての学校段階でスタートしたことになる。特に小学校では「外国語」が教科となり、小学校教員養成課程では、「指導法」と「教科に関する専門的事項」の科目が加わっている。発表者が担当する「指導法」の授業において、学生は学習指導案を作成し模擬授業も行うが、その模擬授業の中で評価をする場面が出てくることはなく、また、教育実習においても、実際に評価まで経験させてもらうことは、ほとんどないようである。学生は、評価の方法について知識を得たとしても、それを使って評価をするという経験を積むことが難しい状況にあり、先行研究でも指摘されているとおり、評価に対して不安を抱く学生は多い。

本発表では、学生の評価する力を養うための手立てを模索するために行った実践事例について報告する。10名程の学生に対して、まず「英語授業の評価について」「話すことの評価について」「ルーブリックとは何か」について記述式のアンケートに答えてもらった。その後、「ルーブリック」の説明と実例を示し、小学校6年生児童になったつもりで「夏休みの思い出」の発表動画をA、B、C評価に相当するようにそれぞれ作成してもらうこと、また、その発表場面に至るまでに想定している当該単元の各授業について説明した。これらの動画から選んだ10本の動画について「話すこと（発表）」のルーブリックを用いて評価を体験し、記述式の事後アンケートを行った。事前・事後のアンケートの結果および学生が作成した発表動画から見えてきたことについて報告する。

ICT 機器を活用した「英語科教育法」の授業とその効果

高橋 美由紀 (鈴鹿大学)

文部科学省の調査において、「教員の ICT 活用指導力」では、小・中学校ともに「授業中に ICT を活用して指導する能力」「児童生徒の ICT 活用を指導する能力」「教材研究・指導の準備・評価などに ICT を活用する能力」などの全ての項目において、事業開始当初と比べて数値が向上している（文部科学省（出典）「令和元年度 英語教育実施状況調査」）。

一方、2019年末から新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の拡大に伴い、大学ではオンライン授業の導入が進められている。筆者が担当している A 大学の「初等英語科教育法」の授業においても、2020年度は対面と遠隔授業を組み合わせる15回の「初等英語科教育法」の授業を行なった。オンデマンドの授業では、発表者が作成した講義ビデオを学生達が視聴して課題をこなすものであり、マイクロティーチングの授業では、動画共有サイト（YouTube）に、学生自身による動画のオンライン投稿をする授業を行った。そして、第16回目の授業で、試験と「小学校外国語教育の履修に関する調査」を実施した。

本発表では、対面と遠隔の授業内容を提示し、文科省の調査結果や文献等の知見から其々の良さを活かした授業づくりについて提案する。具体的には、ICT 機器を活用して行った初等英語科教育法の授業について、授業後に学生達に行った「小学校で英語を指導するために、大学の講義（「初等英語科教育法」等）では、どのような内容を学習しておくが良いと思いますか？」等のアンケート調査から、学生達の意識とマイクロティーチングの授業及び、デジタル教科書等の効果的な活用を踏まえて、その効果について考察し、遠隔と対面の良さを活かした外国語教育の指導の在り方を示唆する。